

言語生活と授業との往還で表現者を育てる実践

授業は、よい俳句の条件（言葉による見方・考え方）を挙げることから始まった。「リズムのよさ」「絵に表しやすい」「気持ちを表す言葉はないけれど、気持ちが伝わる」「いっしゅんのこと」「音」「色（カラフル）」。

本単元は、年間を通した目標である「自分だけの句集をつくろう～春夏秋冬のくらしから～」の「秋」の部にあたる。したがって、この6条件は「春」「夏」の俳句作りや句会の経験で培われた子どもたちの「実感」である。俳句の題材を「くらし」に求めるだけでなく、俳句を作ることや鑑賞することが「くらし」になってきたことが分かる。子どもたちの言語生活に俳句が根付きつつある。本単元は、こうした年間の俳句生活の結節点と言えるだろう。

本時のめあては「おすすめの秋の俳句をしょうかいしよう。」であり、年間目標（単元名）にある「自分だけの句集」に収める優良句の選者となることを求めている。子どもは自らの俳句の作者であり、他者の俳句の鑑賞者である。創作と鑑賞が同時並行しながら相互補完効果を上げる仕組みになっている。かつての読み書き関連学習は、「読み」が先行し、数単元空けて「書き」を行う「時差関連型」がほとんどであった。しかも「読み」の対象は有名な俳人の句であり、「書き」の主体である児童との落差があった。対して本単元は「同時関連型」であり、「読み」の対象が感性や表現力の落差が少ない級友の俳句である。次の創作機会を待つまでもなく、鑑賞が目下の自分の句の推敲に活かせる。これは俳句の伝統である「句会」のあり方に適うものであり、子どもたちに創作・鑑賞双方の必要感を喚起せしめる。

本時は、グループで「おすすめ」の句の選定を行った。協働評価であり、他者の鑑賞や判断に触発されることも学びである。ただ、本時では「選ぶことありき」の多数決に傾いた嫌いがある。協働した上で、選句は各人が行うという方法はどうかだろうか。誰かに「おすすめ」に選ばれた句は31句中18句であった。「ばらけた」と言える。6つの条件の複数を満たした句が多かったということか、それとも同条件の句から各自の好み・主観で選ばれたのか。子どもたち俳句や、鑑賞眼が多様で豊かであったということか。

8つのグループが「おすすめ」した俳句は、②の句が2票、③⑦⑬⑰⑲⑳が各1票であった。授業者はこのあと、個人でよいと思う句にマグネットシートを貼らせたが、「おすすめ」された7つの俳句の作者は（うすうすわかっていたとは言え）明かされず、自評はなかった。また、グループの「おすすめ」に漏れた俳句は対象外であった。再考を要する点ではないか。

学習の成果物として「自分だけの句集」が子どもたちの手元に残り、その後の生活で「一句詠む」際に活かされていくことは喜ばしい。この句集は、単にいくつかの句が並べられたものではなく、作者と選者の直接交流の記録であってほしい。他者の句（アンソロジーの部）だけでなく、他者の自評もあり、自分の句と他者からのコメントも含むもの（オートバイオグラフィーの部）にすることを「おすすめ」したい。

1. 子どもたちのわくわく

(3年国語科・鎌田佳佑先生「おにたのぼうし」の授業)

公開研究協議会当日、授業参観のために教室に入った。子どもたちの表情が明るく、わくわくが伝わってくる。この授業が楽しみなようだ。私もその雰囲気誘われて自然と気持ちが軽くなる。

授業が始まる。ある子どもが、授業者・鎌田先生の話聞きながらも何やら教材（本授業は絵本『おにたのぼうし（文・あまんきみこ、絵・岩崎ちひろ）』を教材としている）に夢中で書き込んでいる。なんだろうか。覗いてみると、〈おにた〉に吹き出しを描いてその中にことばを書いている。もうその子の中では、〈おにた〉が動き出しているようだ。そうか。教室に入った時の明るい印象は、これだったのか。子どもたちの中で『おにたのぼうし』の世界がもうすでに動き出して、人物たちがいきいきと生きているんだ。〈おにた〉や〈女の子〉に出会える。そんなわくわくなのだろうか。

(6年国語科・米山小幸先生「ぼくのブックウーマン」の授業)

子どもたちが自身の選んできた本を紹介する。どの子も、「これだよ、これ」と本を差し出した手から紹介する本への隠しきれない熱意が湧き上がっている。紹介している本は、その紹介している子ども自身にとっても、思い入れのある本のような。自身の紹介だけでなく、「なぜその本にしたのか」と尋ねる姿からは、気持ちが入って選んだ経験をした者同士だからこそ分かち合えている、「本への思い」を聞き出そうとしていることが見取れる。「戦争」というテーマで括られたグループの子どもたちに、授業後に「なぜ戦争に関する本にしたのか」と尋ねた。どの子どもたちも、〈カル〉に戦争の切実さを知ってほしいんだと、その子なりのことばで語ってくれた。その語っている様子から、それぞれがそれぞれの理由があって選んでいるのだということを、私自身が強く実感した。

2つのエピソードはどれも、子どもたちが夢中になって教材である文学作品世界に入っている姿である。そしてそのような子どもたちの姿を引き出した授業が実現できたのは、授業者が子どもたちの興味関心を見取り、子どもたちに合った授業を構想したからである。

2. その人のまるごとを受け入れて想像・創造し合う

忘れられないやり取りがある。〈おにた〉が女の子の家のドアをノックする様子を、みんなの前で動作化している授業場面でのことである。みんなの前に立っている子どもが、ノックをする「とんとん」をととても優しく表現した。「なぜそう表現したのか」に対して表現した子どもは「女の子のお母さんが起きちゃうから」と答えた。それに対して授業者・鎌田先生が「聞いた？・・・(少しの間) やさしいねえ」と全体に語りかけた。そしてその教師の応答を聞いた教室の子どもたちから、その教師のことばを受け入れるあたたかな笑い声があがったのである。

この出来事は、授業者が子どもの表現をただ単に読み取った内容として受け取ったのではなく、「君だからこそ、そう表現した」という表現した子どもをまるごと受け入れた出来事であった。その子はその子自身の感性で、「おにたのぼうし」の世界を想像した——それは、〈女の子〉だけでなく〈女の子のお母さん〉も思いやる心優しい〈おにた〉だった——教室に一人の〈おにた〉が存在していた。そして授業者のことばによって教室全体が受け入れることで、表現したその子どもも教室に心から存在していると感じられた。そんな出来事だった。

「君だから、そう想像する」。この積み重ねが、はっとさせられる想像の飛躍を生むし、そこにその人だから想像し合えたのだという他者との出会いがある。このような営みを、子ども同士もできたらいい。仲間と協力してイメージをつなげて創り上げる活動を仕組みたい。創造する行為を通して、「私とあなたはこんなに想像することがちがうんだ」という気づき生まれるからである。そして協力して作品を創造したというその体験が、一人ひとりの思い出となるからである。

(米山先生の授業は隣のクラスで授業をした時に参観させていただきました。どのクラスでやっていたとしても、米山先生の真意が影響している授業だと考え、見させていただいた授業を今回は扱って述べています。)